

Book Review

評者：松井健太郎 国立精神・神経医療研究センター病院
臨床検査部睡眠障害検査室医長

医療者のポスターデザイン

美しく伝え、心に響く学会ポスターの教科書

著：小林 啓／発行：医学書院

定価：3740円（本体3400円＋税10％）



「なんとなく良い」を言葉にできる本

「自分のポスター、悪くはないと思うけれど、何かが物足りない」。

学会発表のポスターを前に、そんなふうにしたこととはないでしょうか。あるいは、後輩のポスターを直そうとして、「ここをこうしたほうがいい」とは思うのに、その理由をうまく言葉にできなかった経験はないでしょうか。

本書『医療者のポスターデザイン』は、そうしたもどかしさに応えてくれる一冊です。ポスター作りに限らず、医療者・研究者が情報を分かりやすく伝えるための基本が、ここには詰まっています。

本書の一番の価値は、デザインの善し悪しを「言語化」してくれるところにあります。見た目が良いポスター、そうでないポスターは確かに存在しますが、「なぜ良いのか」「どこが惜しいのか」を説明するのは、思いの外難しいものです。本書は、このうまく言葉にしやすい部分、すなわち見やすさや読みやすさ、納得感がどこから生まれるのかを、丁寧に解きほぐしてくれます。しかも本書はテクニックの紹介にとどまりません。「なぜデザインをがんばるのか」という心構えから説き起こし、デザインが飾りではなく、情報を正しく伝えるための技術であることを伝えてくれます。

扱う範囲も実に幅広いものです。タイトルやアイキャッチ、情報の強弱、視線の流れといったデザイン

の基本要素から、色の使い方やコンセプトカラーの考え方、フォントや行間の整え方で解説されており、読みやすさが細部の積み重ねで決まることがよく分かります。私は特に「アイキャッチ」を意識したことがなく、大変参考になりました。また、紙の材質やフォーマット、ポスターの幅といった、誰も教えてくれないけれど結構大事な知識まで押さえられているのもありがたいところです。近年話題の生成AIの具体的な活用法についても触れられています。

本書の後半は実例集とテンプレートが大きな比重を占めています。学会会場でよく見るありふれたポスターを、視認性が良く、抜け感のあるものへと変換するポイントが解説されており、「実際にどう作ればよいか」が具体的にイメージできます。さらに発表時のお作法や、資料を入れたクリアファイルのような「手土産」を用意するといった実践的なふるまいまで扱われており、ポスターは作って終わりではなく、良いプレゼンテーションやその後の対話まで含めて設計するものなのだ、と考えさせられます。

「なんとなく見やすい」「なんとなく良い」を再現可能な知識として体系的に学べる一冊として、本書を医療者・研究者に強くお勧めします。後輩にも、ぜひ手渡したいと思える本でした。